


Next 100 years  chourakukan

# Chouraku-Miou

長い楽しみは未だ半ばにもならない— 長樂未央 

長樂未央 Autumn & Winter 2011 Vol.16



くまもと  
熊本 マリ さん (ピアニスト)

『長樂対談』 第十六回

## PROFILE

熊本 マリ さん (ピアニスト)

東京都出身。英国王立音楽院卒業。1986年より演奏活動を開始。世界各国のオーケストラとの共演や国内外でのリサイタルに加え、執筆、テレビ・ラジオなど多彩な活躍で幅広いファンを獲得。軽快なトークをまじえたコンサートは特に人気が高い。2008年より大阪芸術大学教授。

長樂館オーナー 土手 素子 土手家に嫁いで以後、京都市指定有形文化財「長樂館」の動態保存と活用に情熱を注ぐ。三女の母。

一台のピアノが時を越えて  
結んだ縁、奏でるドラマ。

【長樂未央】今回お迎えしたのは幅広い活躍で知られるピアニスト、熊本マリさんです。この秋の長樂館のサロン・コンサートで、ベーゼンドルファーのピアノ開きをお願いするご縁があり、お話も楽しく弾みました。

土手 このたびは京都国民文化祭への参加事業でもある「村井吉兵衛展」が当館で開催されますが、その記念イベントとしてサロン・コンサートへのご出演をご快諾いただき、ありがとうございます。

熊本 こちらこそ、こんなに素晴らしい場所で、名器ベーゼンドルファーのピアノ開きという大役をいただき、たいへん光栄です。ベーゼンドルファーは低音がよく響き、渋い華やかがあるピアノ。そのよさを活かした演奏をと思っています。それに長樂館さんにとっても特別の思い入れがありだとお伺いいたしました。

土手 そうなんです。当館の名付け親でもある伊藤博文公が渡欧中のウィーンで、リストの奏でるベーゼンドルファーを直接耳にされたという逸話があるんですよ。それから約四半世紀の時を経て、当時は村井吉兵衛の迎賓館だった当館に伊藤公が宿泊された折に「長樂館」の名を頂戴しました。今も当館には、その時揮毫された「長樂館」の扁額を掲げています。この館にベーゼンドルファーを迎えて、ウィンナートーンを響かせたい。そう



すればお客様はもちろん伊藤博文も村井吉兵衛氏も聞き入って飲んでもらえるのでは…と、ずっと長い間探し求めておりましたところ、このたび縁あってようやく気に入ったベーゼンドルファーに巡り合う事ができました。

**熊本** とても興味深いお話ですね。私、歴史上の音楽家に一人だけ会えるとしたら、迷わずリストと答えるくらい、リストのことが大好きなんです。作曲家だけでなく演奏家でもあった若かりし頃のリストはその容姿、パフォーマンスも含めてスター的人気を得ていた人です。音楽家としても男性としてもとても魅力的で、ヨーロッパの各地を旅して演奏会を開いては、土地土地で浮き名を流すような華やかな人だったんですよ。当時、観客たちは社交会のサロンというとても近い距離で、演奏家とのやりとりも含めて音楽を楽しんだんですが、最前列で失神されるご婦人もいらしたとか(笑)。

**土手** まあ、お逢いしてみたかったわ(笑)。折しも今年はリスト生誕200年の節目にもあたる年でしょう。そんな時にデビュー25周年を迎えられたマリさんとこのようなご縁ができ、リストが愛してやまなかったというベーゼンドルファーを奏でていただけることにもロマンを感じます。

**熊本** こちらは建物からお部屋の雰囲気、調度に至るまで、まさにリストが演奏していた時代を彷彿とさせる空間で、本当に素敵。訪れた時からうっとりしています。演奏会ではお客さまにも、タイムスリップしたような気分が当時の空気感まで味わっていただきたいですね。

### 音楽は軽やかな心で楽しむもの

**土手** 今のマリさんのお話のように、作曲家の華やかなエピソードなどを伺うと、クラシックが身近に感じられますね。日本では、クラシックというだけで、やっぱりどうしても堅苦しくなってきたりと勉強して予備知識がないと聴く資格がないような、楽しもうというより理解しようとして構えてしまいます。

**熊本** 私のライブはいつも演奏の合間にお話をするんですが、その時も歴史的なことや作曲家のウチクよりも、私が好きなエピソードや、演奏家としてその曲で感じたこと、体験したことなどをお話するようにしています。お料理でも、シェフがどうしてその素材を選びどんなイメージで作ったのかを伝えるのが重要なように、その演奏家ならではの感性で、足を運んでくださったお客さ

まの感性に訴えることが一番大事だと思うんです。もしそれで興味が生まれたら、作曲家や曲のことはインターネットでもいくらでも調べられる時代ですから。

**土手** 確かに楽しくないと興味が持てませんものね。  
**熊本** 私はだいたい、最初に一曲弾いた時に客席から伝わってくる空気で、お客さまが何を望んでいるの場にいらいちゃったか…クラシックになじみのない方が多いか、マニアックな方が多いのか、純粋に楽しみに来られた方が多いのか等々がわかります。それによってトークの内容を変えますよ。

**土手** まあ、面白い。演奏のテクニクはもちろんですが、そうした機転も素晴らしい才能ですね。きつと素敵な演奏会なのでしょうね。マリさんご自身、音楽を本当に愛して楽しんでこられたことが伝わってまいります。それはやはり、マリさんが10歳からの多感な時代をスペインで過ごされたことも関係しているのでしょうか。

**熊本** そうですね。スペインに暮らすことになったのは、父の仕事の都合からでした。ピアノは日本で5歳から習っていたのですが、練習が苦痛で大嫌いだっただんですよ(笑)。それが、あちらの先生はとっても褒め上手で。「あなたは天才!」と言われて俄然やる気になったという(笑)。それに先ほども申しましたが、ヨーロッパでは誰もが本当に気軽に演奏会を見に行けるんですよ。常に一流の音楽に接していられたこともとても貴重な体験でした。子どもの頃から本物を見聞きすることが重要です。私はそんな環境に身を置くことができたおかげで、14歳の時、プロになろうと決心し

ました。日本にあのままだら、絶対にピアノニストにはなっていないね(笑)。

**土手** 要は豊かな感性を育むことですね。マリさんはたまたまピアノで素晴らしい出逢いがあった、その芽を伸ばす環境に恵まれて、そんな出逢いがあるかないかで、人生は大きく変わりますね。それでもプロとして活動を続けられるのはひと握り。しかもマリさんのように長く第一線で活躍されるには、やはり類い稀な才能と努力が必要だと思います。

**熊本** 私が常に心がけているのは、とにかく一生懸命にやるということ、それから弾くことにおいても活動においても、自分にしかできないことを大切にすることです。同じ音楽を生業にするにしても、コンサートを開くのがすべてではありません。これからの時代は、人を癒すことに特化するあり方も求められると思いますし、教育で子どもたちの感性をいかに育むかを追求していくのもひとつの手段。そんなふうには、ピアノひとつとっても、さまざまな役割が考えられます。要は、自分がその活動を通していかに世の中の役に立っているかを考えることが基本ですよ。私自身ずっと、自分が演奏することで、どうしたら人々により深いよるこびを味わっていただけるかを考えながらやってきました。

**土手** 私どもの仕事でも同じことが言えるかも知れません。お客さまをもてなし、お一人おひとりに満足していただくためのマニュアルはないし、答もひとつではないんです。各自が努力と経験と想像力で、その応用問題を解いていくんですよ。

**熊本** こちらはスタッフの方のマナーも行き届いていて、きめ細かな心配りと心地よさを感じました。見かけは洋の世界ですが、日本の心を感じますね。

実は私、来春に日本の伝統的な音楽をピアノで奏でるとして初めての試みのアルバムを発表する予定なんです。本日、こちらにお伺いして、歴史ある洋館に日本の風景、ホスピタリティがしっかりと調和する雰囲気、まさに現在構想していることにぴったりだと思いました。この窓からの眺望も素晴らしいし、ぜひこれを機に、四季それぞれの魅力を堪能させていただきたいです。

**土手** ええ、ぜひ何度でもいらしてください(笑)。どの季節もそれぞれに情緒があつて美しいですよ。11月も半ばになると、色づきはじめた木々が美しく映え、また格別です。そんな中でのサロン・コンサート：マリさんの演奏はもちろん、解説をお願いする桂米團治さんのおしゃべりもきくと楽しいものになるでしょうね。今からワクワクしています。本日は本当にありがとうございました。



## 熊本マリ ニューアルバム

### 『鳥の歌〜愛のメッセージ』発売中

2010年はショパン、2011年はリストの生誕200年のメモリアルイヤヤー。ショパン・イヤールからリスト・イヤールへの懸け橋として、『愛のメッセージ』をテーマにしたとっておきの選曲。おなじみの名曲から新しい素敵な出会いの曲まで、多種多様なプログラムをお楽しみください！



◆発売元：キングレコード  
◆KICC-911 2,000円(税込)

## 素子の coffee break

ピアノのそばに飾られた、真っ赤なグリアのように、華やかで存在感のあるマリさん。小菓子を素早く次々とお口に入れながら、恋するリストを熱く語られる調子はマリさん節。そして、チョットとした仕草のテンポはマリリズム。どちらもとってもチャーミング。マリさんという音楽に魅了されたひとときでした。



# The Wedding

Chourakukan

京都・東山の麓、  
明治時代に国内外の賓客を  
おもてなしする為に築かれた長業館。  
一步足を踏み入れるとそこは  
華やかな別世界。  
時代を超えて受け継がれる贅と美、  
晴れやかな日にふさわしい風格と  
たたずまい。  
おふたりの大切なゲストを  
敬意をもってお迎えます。  
この館に刻まれた思い出は、  
消えることなく建物とともに  
未来に残されます。

<http://www.chourakukan.co.jp>



## キャンドルや暖炉の灯りを楽しむ ウィンタープラン

【40名様 100万円 ※1名追加2万3000円】

対象：12月～2012年2月の披露宴を成約のカップル  
※期間除外日がございます ※他プランとの併用は不可です

各レストランでの内覧会も定期的で開催しております。  
詳しくはホームページをご覧くださいませ。

## 102th Anniversary Special Wedding Photo Plan

100年の歴史ある本物の迎賓館で  
一生の記念になるお写真を残しませんか？

【102周年記念アニバーサリープラン特別価格】  
※2011年12月～2012年2月の平日限定！

- 洋装フォトプラン 148,000円(税込155,400円)  
※通常価格178,000円(税込186,900円)
- 和装フォトプラン 198,000円(税込207,900円)  
※通常価格268,000円(税込281,400円)

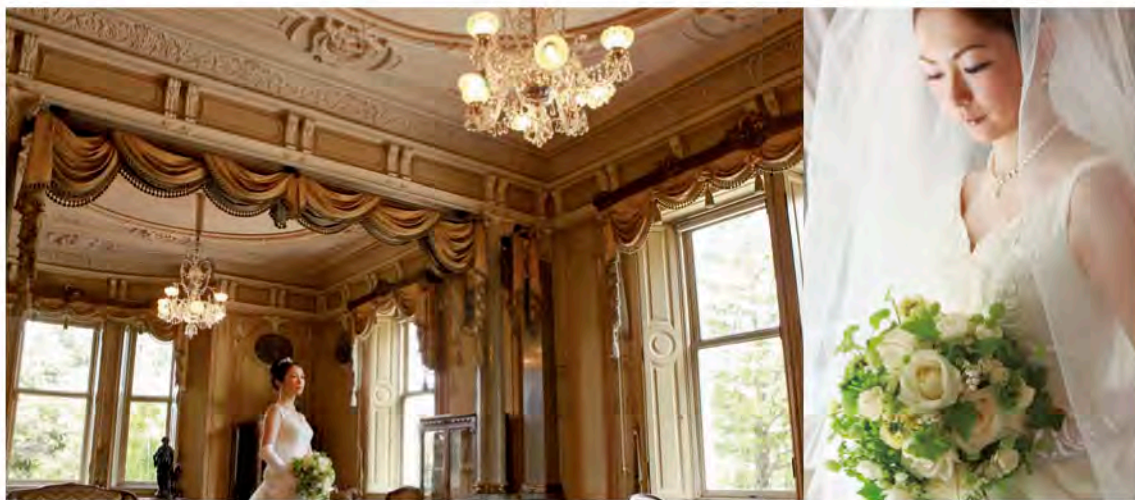
# Introduction of Chourakukan

【長楽館紹介図鑑】

vol.5

## 「思いを形にする感動」

ウエディングプランナー 森島 達也



写真はイメージです。

**結** 婚式にはきまった形はありません。  
そして最初から自身の結婚式を完璧にイメージ  
されているお客様はほとんどいらっしゃいません。  
ゆっくりとお客様とお話をしながら、ご要望を  
ひとつひとつお伺いし、その思いを形にする。  
そして、それ以上のサプライズ—新郎新婦やご参列  
の皆さまの想像を超える特別な日を創り上げる。  
それが私達プランナーの存在意義だと考えています。  
形のないものを書面と頭の中に描き、共に悩み、  
考え、苦勞し、当日を迎える。そうして出来上がった  
特別な結婚式には、素晴らしい感動があります。  
「こんなことって出来るのかな？」  
「私たちがしたい結婚式ってなんだろう？」  
「何から相談したらいいのかも、分からない」  
些細なことでも、どうぞご遠慮なく。  
ご相談の際には、何でも質問してみてください。  
それがお二人らしい結婚式への第一歩です。  
一緒に長楽館でしか味わえない歓びを創りましょう。  
どんなところだろう？と長楽館に興味をお持ち  
いただけたなら、是非一度ご来館くださいませ。  
お目にかかれます日を心待ちにしております。

### Tatsuya Morishima

出身地京都 2008年長楽館に入社。婚礼のサービス業務を  
経験後、ウエディングプランナーへ転身。サービススタッフ  
の視点と、プランナーの視点からお客様へご提案し、結婚  
式を心をこめてプロデュースさせていただきます。



# 迎賓館へようこそ

## episode 6. ベーゼンドルファー物語

この度、長楽館でピアノの「お披露目サロン・コンサート」が開かれるという。人気のピアニスト3人が、入れ替わり立ち替わり、3夜にわたって華々しく繰り広げられるという。まるで長楽館が建てられた当時、毎夜開かれていたという社交界の夜会の再現そのものだ。当時、音楽会は広間で開かれることが常な「室内楽」であった。演奏者と聴衆は手の届く程の距離で、演奏者の指使いや息遣いまで伝わってくる、聴衆にとっては迫力満点の贅沢さであった。平成の今、明治時代にタイムスリップしたような贅沢な本来の音楽会が開かれる。ならばこれを機会に、是非話しておかなければならないエピソードがある。

### 【長楽館のピアノ】

#### ◎ウィンナートーン

長楽館本館にこの度お目見えしたピアノはベーゼンドルファー。1955年にオーストリアのウィーンで産声をあげた（製造番号27457）。ベーゼンドルファー社は1828年「音楽の都ウィーン」で創業。当初から高品質、高水準という名声を得、1830年にはオーストリア皇帝から初めて「宮廷御用達のピアノ製造者」の称号を授けられた。熟練した技術者によって手作りで造られるところから、製造台数は極端に少なく、主に室内楽に適しており、「ウィンナートーン」と呼ばれる美しい音色を生みだすところから、古くから名器との定評を得ている。

#### ◎伊藤博文公とフランツ・リストとの出会い

明治15年（1882）、伊藤博文は明治天皇の命を受け憲法調査のために渡欧、ドイツ、オーストリアに学んだ。渡欧中、ウィーンで超絶技巧の弾き手が弾くベーゼンドルファーを聴き、「あの上手な弾き手をピアノ教師として日本へ招聘せよ。」とお付きの者に命じたという。このときの弾き手こそ作曲家としてだけでなく、ピアノの弾き手としても円熟期に入り、ベーゼンドルファーを好んで弾いていたフランツ・リスト（1811～1886）その人であった。残念ながら実現はしなかったものの、このとき伊藤博文41歳。西洋の文化を旺盛に取り入れようとした明治期の息吹が感じとれるような気がします。

#### ◎伊藤博文公と共に楽しむサロン・コンサート

帰国後、明治22年（1889）伊藤博文を中心として草案された大日本憲法が公布され、伊藤博文は初代内閣総理大臣に就く。それから20年の歳月を経た明治42年（1909）、伊藤博文は完成したばかりの



▲今回長楽館にお目見えするベーゼンドルファー



▲フランツ・リストの若かりし頃から晩年までの肖像

村井吉兵衛の別邸に來泊。その別邸を村井吉兵衛の雅号「長楽」に因んで「長楽館」と命名した。

伊藤博文が「長楽館」と揮毫した扁額は、中二階「喫煙室」入口の上に今なお当時のままに掛けられ、お客様をいつもお迎えしている。伊藤博文は長楽館の中に今なお、生き続けているといえよう。

伊藤博文がウィーンでリストの弾くベーゼンドルファーに出会ってから約130年を経た今日、長楽館で奏でられるベーゼンドルファーのウィンナートーンを、館のどこかにいる彼と一緒に聴ける。これをロマンといわずにいられようか。  
(吉村 井兵衛)